

---

# ツキと王

鷹坂光樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツキと王

### 【Nコード】

N6097H

### 【作者名】

鷹坂光樹

### 【あらすじ】

「あたしのことお、殺してえ？」死にたがりやの少女が出会ったのは、闇よりも深く悲しい一人の王。【人間は醜い。だからこそ、憎い】人間嫌いの王が出会ったのは、誰よりも死を望む哀れな少女。孤独な王と自らの死を絶対とする少女の物語。留まりを知らないダイクファンタジーが、今始まる。興味がございましたら、どうぞお越しください。お待ちしております・・・。

## 始まりの夜（前書き）

プロローグ的なものですので短いです。

基本、こんな感じで書いていきますね。

どうぞ、シリアスが苦手な作者の物語をご覧ください・・・・・・・・。

## 始まりの夜

少女は、歩いていった。

夜風に靡く草原の上。月の見下ろす暗闇の中。

森に囲まれた広い草原の真ん中で、少女は深く息を吸った。  
酷く張りつめた空気が、体の中を蹂躪する。

・・・あつたかい。

少女はただそう思うと、ふいに森の方へと歩き始めた。

足や手を動かす度、繋がれた長い鎖が音を立てる。

手から手へ、足から足へと伸びた鎖は赤黒く錆びついていて、少女から解き放たれることはなかった。

痩せこけたみすばらしい姿。ぼろぼろで薄汚れた長い白地のワンピース。

少女は見慣れた自分の姿を気にせず、闇の広がる森へと足を進めた。

森の中は静かで、誰もいなくて、真つ暗で。

少女はそんな自然の姿にどきどきした。

そしてその中に入ろうとした瞬間。

【去れ、人間】

低く雷のような轟きが、静寂を切り裂いて降ってきた。

少女はピタリと動きを止め、じいっと目の前に立つ木の上を見つめた。

ざわり、と木々が蠢いた。

でもおかしいことに、風は吹いていなかった。

葉っぱの隙間から覗く、暗闇よりも深く寂しいふたつの闇が少女を見下ろしていた。

「き、れい……」

息も、言葉もつまるような、そんな姿をしていた。

声や姿からして男の人のようだった。

それでも少女は、そんな綺麗なひとを見たことはなかった。

今まで醜い人間ばかり見ていたからか、少女の目は一心に輝いていた。

それを見た木の上の人影は、さらに不機嫌そうに口を開いた。

【去れ、人間。ここはお前の来るところではない】

人間、と聞いて少女は顔をしかめた。

「にんげん、違うーあたしはあ家畜だよー」

その言葉を聞き咎めたか、人影の眼はゆらりと揺れた。

空気はピリピリと切り詰めていたが、恐怖さえも知らない少女にそれがなんなのかは理解できなかった。

「ねえ、綺麗な黒おいひと……」

少女は開けるだけ腕を開き、くすくすと笑った。

綺麗なひとが自分を見ていることが、なんだかおかしかった。

「あたしのことお、殺してえ……?」

闇はただ静けさに佇んで。

月は空の冷たさに凍りついて。

きらきら輝く、  
奇妙な月夜のことだった。

## 始まりの夜（後書き）

こんな流れですね。

読んでくださった方、ありがとうございます。

良ければ感想を残してくださいと、作者が泣いて喜びます。  
それではまた、次回でお会いしましょう。

第一夜 奇妙な鳥の言葉（前書き）

## 第一夜 奇妙な鳥の言葉

起きろ、起きろ……

頭に響く、井戸に落ちるような声。

起きろ、人の子よ……

誰かが、呼んでる……？

「う、ん……」

ごろんつと寝返りして薄く目を開くと、そこには視界いっぱい広がる緑があった。

少女は地面がふかふかしていることに気づき、バツと辺りを見回した。

どこを見ても木々や草木があるだけで、探しているものは見当たらない。

……行っちゃった、のかな。

もう一度眠ろうとしてごろんつと寝ころぶと、目の前に小さな黒い影があった。

少女はきよとんとしてそれを見つめた。

「あー黒いひとお〜？」

『……ほう。私の姿に驚かんとは、なかなか礼儀を知っているな人の子よ』

低いガラガラした渴き声に、耳元ではさばさと羽の音。  
少女は、残念そうに眉をひそめた。

違う……。

目の前を飛んでいたのは、鳥だった。  
でも、おかしい鳥。

鷹みたいに鋭い爪とくちばし。鳶みたいに大きい翼。  
それらが付いたフクロウみたいな鳥だった。

少女はじいっとその生き物を見つめ、くすつと笑った。

『……人の子よ。何故笑っている？』

「ん？だあって楽しいもーん」

少女がけらけらと笑いながら言った。

奇妙な鳥は、自分よりも奇妙な少女を見つめ、やがて口を開いた。

『人の子よ、名は何と言う？』

「……ナ？」

『人の呼び名だ。お主にはないのか？』

「ナよびナーうん……ないっ」

少女の元気な返答に、鳥はふむと何か納得したようだった。

「ねえ、トリさんのナはあ？」

『私か？私の名は夜牙だ』

「……ヤガ？」

『夜の牙と書く……時に人の子よ』

「あい？」

夜牙がしばしの間を空け、よかろうと何やらつぶやいた。そして少女の方を向き、吸い込むような瞳で見据えた。

『お主は……森の王に会っただろう』

その途端、少女が目を見開いてガバツと飛び起きた。脳裏にはあの綺麗な黒い眼をした影が映っていた。夜牙はバサツとはばたき、少女の前に降り立った。

「黒いひと！」

『ふむ、どうやら会ったらしいな……人の子よ、お主はこの森で生きるか？』

「えっ！ いていいの!？」

『私が決めることではない。人の子よ、この森を進んだ先に大きな館がある。そこへ行け』

「なんで??？」

『そこに彼の方がいらっしやる。そして名を求めるのだ。それさえ出来れば、お主は森の主認められたこととなり、この森で生きていけよう』

「やったー！ 行く行く!!！」

ならば、と夜牙は自分の羽根を一枚抜き取り、少女の耳にかけた。

『行け、名を持たぬ人の子よ』

「はあーいっ」

少女はまるで遠足にでも行くかのように、嬉しそうな表情で森を突き進んだ。

もういつかい、黒いひとに会える……

少女は駆け抜けながらくすりと笑った。

小枝に引つかかれても、こけそうになっても、少女はその足を止めることはなかった。

『ふむ……』

ばさばさと羽をはばたかせながら、夜牙は少女のいた地面に降り立った。

『人の子よ……お主がもう一度彼の方にお会いすれば、その命を落とすかもしれない……だが、王と出会い生きている人間はお主のみ。』

運命が許せば、また会い間見えようぞ……』

一羽の鳥の囀りは、儚くも一陣の風に掻き消えてしまった。



第一夜 奇妙な鳥の言葉（後書き）

今回も短いです……。

本当にすみません（；|；）

区切り区切り物語を始めていききたいと思います。

次話はまた、あの方が出てきます。

物語の行く末を、どうぞご覧あれ……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6097h/>

---

ツキと王

2010年10月13日13時12分発行